様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25　年　5　月　31　日現在

機関番号：１６４０１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010～2012
課題番号：22720102
研究課題名（和文）　ヴィクトリア朝詩学の確立と破綻—文芸雑誌上の論議を手がかりに

研究課題名（英文）　The Birth and Demise of Victorian Poetics

研究代表者
関　良子　　（SEKI YOSHIKO）
高知大学・教育研究部人文社会科学系・講師
研究者番号：10570624

研究成果の概要（和文）：本研究では、以下に挙げる二つの研究方法を取ることで、21 世紀的見地からヴィクトリア朝詩学の再定義を行なった。第一に、現代のヴィクトリア朝詩学「観」が、いまだ 20 世紀初頭の文芸批評からの強い影響下にあることを実証した。第二に、近年加速度的に増加する 19 世紀文献のデジタル資料を利用することで、ヴィクトリア朝文学の新たな研究方法の可能性を提示すると同時に、研究環境の整備が急務であることを提言した。

研究成果の概要（英文）：This project aims to redefine Victorian poetics from the 21st-century viewpoint. For this purpose, I worked on the project from two perspectives. First, I elucidated how our understanding of Victorian poetics has still been influenced strongly by the early-20th-century literary criteria. Second, to redress this tendency, I demonstrated how digitized archives of 19th-century literature are useful for overseas researchers, and insisted that it is an urgent task for humanities scholars to join in the debate on digitization of historical resources and to collaborate with scholars who release digitized archives to the world.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学
キーワード：英米文学、文学論、詩学、ヴィクトリア朝、デジタル・アーカイヴ、文芸雑誌

１．研究開始当初の背景

従来、ヴィクトリア朝詩学は、先行するロマン派詩学、後続するモダニズム詩学と比べ、英文学史上、顕著な特徴が見られないものと

等閑視される傾向にあった。申請者はこれまでの研究の過程で、このようなヴィクトリア朝詩学軽視の要因の一つに、20 世紀初頭の詩人や批評家による反ヴィクトリア朝的精神があることに気づいた。さらに、こうした批評家の多くが、英文学研究の学問としての体系化に大きな役割を担った人物であることから、彼らの批評基準が現代の英文学研究に及ぼす影響がいまだに強いことが判明した。そこで、20 世紀初頭の批評基準というフィルターを通してのみ捉えられていた 19 世紀ヴィクトリア朝詩学を、21 世紀的見地から捉えなおすことは、「英文学史の修正」という広大な視野から見た場合にも重要な研究課題であると考え、本研究を開始するに至った。

また、英米では 20 世紀後半より 19 世紀当時の文芸雑誌を利用した研究が盛んに行われていたのに対し、こうした研究の取組みは日本国内では今なお活発であるとは言えない。それには、海外ではこうした資料が入手困難だったという事情が深く関係していたが、近年加速度的に増加しつつあるデジタル資料のお陰でそれらの資料の利用も可能になりつつある。しかし一方で、人文学研究者にはこうしたデジタル資料に対する心理的距離が縮小されておらず、こうした資料を利用した研究方法も未確立であると言える。そこで、インターネット上に提供された一次資料を活用し、ヴィクトリア朝文学研究の新しい研究方法の開拓を試みようと考えたのが、本研究を開始するに至った動機である。

２．研究の目的

本研究の目的は、19 世紀中葉から 20 世紀初頭のイギリス文芸雑誌における詩学論議を精査し、中期ヴィクトリア朝詩学の確立と破綻の経緯を解明することである。換言すれば、21 世紀的見地からヴィクトリア朝詩学の特質を再定義することに主眼をおく。この「21 世紀的見地」という表現には、二つの目論見が存在する。第一に、現代のヴィクトリア朝詩学に対する考え方が、いまだに 20 世紀初頭の批評基準からの強い影響下にあることを論証すること、第二に、最新の研究環境を活用することである。19 世紀の文芸雑誌を一次資料に扱った研究の可能性は、英米の研究機関からの 19 世紀出版の文献ファクシミリをウェブ上に公開するプロジェクトが急増したことにより拡大しているが、日本での利用はいまだ盛んだとはいえない。そこで本研究では、20 世紀初頭の批評基準というフィルターを通してのみ捉えられていた 19 世紀ヴィクトリア朝詩学を 21 世紀的見地から捉えなおすべく、19 世紀文献のデジタル資料を活用した、ヴィクトリア朝文学研究の新しい研究方法の開拓をも試みる。

３．研究の方法

(1) 19 世紀・20 世紀の文芸雑誌の復刻編集版や、近年出版された事典を購入し、読むことで、それぞれの時代に文芸雑誌がもっていた社会的意義について理解を深めた。

(2) ヴィクトリア朝詩学・モダニズム詩学について論じた研究書や学生向け入門書(Companion)を多く収集し、出版年順に内容を整理することで、二つの時代の詩学がこれまでどのように捉えられ、時代を経るうちにどのように変容しているかを考察した。

(3) 大英図書館及びケンブリッジ大学図書館にて F. R. Leavis の未出版の博士論文や評論、彼および同時代の英文学者・大学教員の評論や小規模に出版されたブックレット等を取材し、20 世紀初頭の英文学研究・教育の在り方と、当時のヴィクトリア朝詩学の認

識を調査した。

(4) Research Society for Victorian Periodicals (Yale Univ.), Growing Knowledge (British Library), Digital Humanities Summer Institute (Univ. of Victoria, Canada) に参加し、アメリカ・イギリス・カナダの研究者らと意見交換を行なった。更にそれらの議論をもとに進めた研究の内容を国際会議 Osaka Symposium of Digital Humanities (大阪大学)にて報告した。

(5) 19 世紀のソネット復興と 20 世紀初頭のソネット批判を題材に、ヴィクトリア朝詩学の「確立と破綻」の一端を分析した。

(6) アルフレッド・テニスンの詩とマシュー・アーノルドの文芸批評を題材に、文芸雑誌を介した大西洋横断的なヴィクトリア朝詩学の受容を考察した。

４．研究成果

(1) 2010 年度、紀要『国際社会文化研究』に論文「デジタル人文学が拓くヴィクトリア朝文芸雑誌研究の可能性」を発表した。日本国内ではまだ知名度の低い「デジタル人文学」とう学問領域が、特に英米においてどのように発展しつつあるか整理した上で、デジタル資料を利用することによるヴィクトリア朝文学の新たな研究方法の可能性を提示し、同時に研究環境の整備が急務であることを提言した。

(2) 2011 年度、カナダで開かれた Digital Humanities Summer Institute に参加し、デジタル・アーカイヴを制作している研究者や図書館司書らと討論を重ね、相互認識を深めた。また、ここでの討論内容と前年度から続けている考察内容を踏まえ、国際学会 Osaka Symposium of Digital Humanities (大阪大学)において研究発表を行なった。本学会は、デジタル人文学を取り扱う学会としては日本国内で初めて組織されたもので、2011 年の国際大会は設立シンポジウムであった。本学会で申請者は、当該研究分野が英語圏においては Humanities Computing から Digital Humanities へと用語を変更させる傾向にあるのに対し、日本で組織された同学会が Digital Humanities を「人文情報学」と翻訳しているのは時代に逆行するという点を論じた。同学会が翌年より名称を「デジタル・ヒューマニティーズ学会」に変更したことは、研究成果のインパクトの裏付けの一つと言えるのではないかと考える。

(3) 上に挙げた研究成果をもとに、2012 年度には、学部生向けに「デジタル・エディションを鑑定する」という題目の演習授業を開講した。学部生向けに同テーマで演習授業を行なったことは、同研究分野の後進を育成する点では意義深い取り組みになったと考える。

(4) 19 世紀のソネット復興と 20 世紀初頭のソネット批判を題材に、ヴィクトリア朝詩学の「確立と破綻」の一端を分析し、2011 年度、阪大英文学会のシンポジウムにおいて研究発表を行なった。また、その原稿をもとに考察を深め、共著『〈アンチ〉エイジングと英米文学』に論文を発表した。

(5) アルフレッド・テニスンの詩とマシュー・アーノルドの文芸批評を題材に、文芸雑誌を介した大西洋横断的なヴィクトリア朝詩学の受容について考察し、その成果を共著『移動する英米文学』の中に発表した (2013 年度出版確定)。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 関良子「デジタル人文学が拓くヴィクトリア朝文芸雑誌研究の可能性」、『国際社会文化研究』査読無、第 11 号、2010、51－70 頁
http://hdl.handle.net/10126/5057

〔学会発表〕（計２件）

① 関良子「D・G・ロセッティ『生の館』(1870, 1881)における「曖昧化」された加齢」、阪大英文学会第 44 回大会シンポジウム、2011 年 10 月 22 日、大阪大学豊中キャンパス

② Seki, Yoshiko “What Digital Humanities Means for Victorian Studies”, Osaka Symposium on Digital Humanities 2011,（人文情報学推進協議会 設立シンポジウム）2011 年 9 月 13 日、大阪大学豊中キャンパス

〔図書〕（計２件）

① 石田久、服部典之、関良子、他 15 名、英宝社「『アーサー王宮廷のコネチカット・ヤンキー』におけるアナクロニズム―ジャンル横断的／大西洋横断的ロマンス受容―」、『移動する英米文学』2013、［投稿中（掲載確定）］

② 橘幸子、森本道孝、市橋孝道、関良子、服部典之、英宝社「ヴィクトリアン・ソネットにみる不老の喪失―『生の館』の曖昧さが意味するもの―」『〈アンチ〉エイジングと英米文学』、2013、87－122 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

関　良子（SEKI YOSHIKO）
高知大学・教育研究部人文社会科学系・講師
研究者番号：10570624

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし